
『さい・フリ！！』

春風雨雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『さい・フリー!!』

【Nコード】

N2528D

【作者名】

春風雨雲

【あらすじ】

宮沢京也、物語は彼が「桜城高等学校」に入学する所から始まりまゝ。この学校では代々「SAIFURI」（サイフリ）と呼ばれる遊び？が部活対抗で行われていて。はたしてSAIFURIとは何か？そしてキョウウに隠された能力とは？そして3年前の事件と彼を待ち受ける運命は。

プロローグ(前書き)

プロローグ

皆さんは「タイムマシン」もしくは「もう一度人生をやり直したい」と思ったことはないだろうか？ もしもあの時、こうしていればとかな。どうだろう。一度ぐらいはあるのではないだろうか。

俺にとっての人生の分岐点は多分、あの高校に入学したことだと思う。俺にとってあのでの学校での生活は生涯忘れることは無いだろう。

子供のときからずっと、海が嫌いだった俺にとって磯の香りがするこの町がにがてだった。水に入るのが怖かった。なぜ怖いかわからなかった。だがそんな町でも友達ができた。そいつらと小学校に上がり、中学に入った。そしてみんなの進路が決定していった。正直みんなと一緒に高校に行く気は無かった。少しこのマッネリ化した生活に飽きていたのかもしれない。そして時間はあつとゆうまに過ぎていった。

そんな俺の人生が変わるなんて・・・今でも信じられない。

いつからだろう・・・俺が「ツツコミ担当」になってしまったのは。

「・・・なんだ、このつまんねー小説。お前こんなのが楽しいの？」

馬鹿にしたような口調で俺が言う。

「じゃあお前はなにが楽しいんだよ！キョウ！」

（楽しい・・・か）

ふと部屋の隅に置いてある新聞の1面が目に入った。

「高校・・・どこ入るかな。」

桜城高校マジック研究部 その1

『私立桜城高等学校』それが俺が入学した高校の名前だ。なぜこの学校に入学したのかと聞かれると困るが多分、3年前の事件が理由だろう。生徒3人の「行方不明事件」そのことがなぜか俺の興味を駆り立てた。

入学式も無事に終わり知らない顔ばかりの教室の新しい机の寝心地を確かめた後、新担任の挨拶が始まり、午後からは部活見学と言う指示がされた。まったく、「メンド（面倒くさい）」の一言だった。俺は適当に文化部に入って即座に幽霊部員となってバイトでもしようかと考えていたので文化部の部室が集まる旧校舎へ向かった。予想どおり廊下はさむかった。

「よっ!!」

いきなり肩を叩かれた。振り向くとオナ中（この場合同じ中学校出身の奴のことを指す）の「鈴原」だった。

「イテー、触るな、寄るなw」

いつものと同じようなリアクションを鈴原にした。

「はいはい、で、なんの部活入んだ？」

「今それを見に行くところorz」

「たしかにw」

鈴原がアホ丸出で笑う。

「おまえも文化部見に行くのか？」と聞くと。

「いや、お前の後姿が目に入ったからな。」と笑いながら答えた。

そんなこんなで旧校舎までの道のりは結構だるい。1年生の教室は4階にあり旧校舎は一度1階まで下りて体育館を挟んだ向こう側にある。道は渡り廊下でつながっているがまだ春先の気温なので少し廊下が肌寒い。

1階に着いた頃だろうか、書類を抱えた背の低い女の子が俺のまえをとことこと危なっかしく歩いているのに気がついた。どうやら彼女も旧校舎に向かっていているようだった。彼女は変わった形のヘアバンドをつけ前髪を分けていた。その綺麗なながい黒髪はとても不思議な感じを放っていたが彼女は俺たちに気づかないのかそそくさと旧校舎に吸い込まれていった。

大体のやつらが靴に履き替えて運動部の活動を見に行っているのか旧校舎の方にはあまり人がよりついていないことがうかがえた。

「そっぴやさ？」と鈴原が眠そうに俺にしゃべりかけてきた。

「ん？」と話を聞こうとした瞬間に渡り廊下の開いている窓から風が吹き抜けた。

「季節は春」、俺は1年、新生活はゆっくりと、そして確実に始まっていた。

桜城高校マジック研究部 その2

「そういやさ。」(さっきの続き)

「ん？」と首をかしげながら聞く。

「聞いたか、序列の話？」 久々に鈴原が真剣な顔で俺の方を向いていた。

「なにそれ？なにそれ？」とわざと2回繰り返して聞いた。

「あいつ知ってる？ほら、B組の溝口あきら？」と軽快に喋る鈴原に「入学したばかりなんだから知らねーよorz」と言い返す。

「まあ、そいつから聞いた話なんだけど、この学校の生徒会はその序列の上位の奴らで構成されているらしいんだ。」

「どっかの格闘マンガか？」

「チゲーYO！」と鈴原が変顔で答えた。

「お得意のへボラップか？」と心の中で叫んだ。

「で、その序列が何なん？」

「そうだった。実はこの学校内でルールが決められててバトルができるらしいんだよ。」

「バトル??」

「そう、で、あいてがケガとかをしても学校公認だから謹慎とかの処罰が無いらしいんだ。」

予想に反しておもしろそうだった。

「どつやったら参加できるんだ？」

「それはな!!! 分からんorz」

「.....」

「まあ、それは置いといてさ、ここが旧校舎！ ようこそw」とふざけた口調で鈴原が言う。

旧校舎は予想に反してきれいだった。 3階建ての校舎の中には13もの文化部がはいっているらしい。その他にも図書室、コンピュータ教室、などがあるらしい。

「へー、キレイじゃん。」

「そうだな、じゃあここから別行動な。」 そう言って鈴原は2階へとすがたを消した。

旧校舎の中に入ると各教室の前でいろいろな部の人たちが部員を募集していたがその奥にある「資料室」と書かれている教室がなぜか目に入った。

「?????」

入り口には「マジック研究部」と書かれていた。

「なんだここ？」

部活動案内に目を通してみた。

「ええと？ 活動内容は？」

ドンー！！

「痛って！」 つい口にだしてしまった。

「おお、悪いな少年w 入部希望者か？」

大柄のがたいのいい男がそこに立っていた。

「まあいいや、俺は2年の「小宮潤」だ、宜しく！」

「俺はミヤザワです。宮沢京也。よろしくおねがいます。」

そう言うと小宮さんは部室の扉を開いた。

退屈な人生・・・キツカケが・・・俺は欲しかった。そして
俺はこの部活と出会った。

桜木高校マジック研究部 その3

「おい『根暗』部長！ 新入部員的な少年連れてきたぞ！」

小宮さんが笑い混じりの口調で叫んだ。

「根暗じゃねーし！ 北条だし。」

さつき書類を抱えていたかわいらしい女の子だった。 彼女はうれしそうな顔で俺を見た。

「しかし君、よくあの張り紙が見えたわねw あの張り紙普通の人には『関係者以外立ち入り禁止にみえるんだけど・・・ うん、君は合格ね。」

なんのことが分からなかった。

「てかコミちゃんなんか用かい？」

小宮さんは「コミちゃん」と呼ばれていた。

「そうだった。バスケ部入部希望者16名中『素質』がある奴7人だ、そいつらの名簿書いてきた。」

そう言うと小宮は封筒を差し出した。

「今年は各部活だいたい平均5人て所ね。」

「じゃあそれ渡したから部活もどるわw」

「了解！ おつかw じゃあねコミちゃん。」

「少年もじゃあな。」

「ども。」

そう言い残して小宮さんは去っていった。

「じゃあ本題ね、君はうちの部活に入りなさい！」

「なんでそうなんですか？」

「ああ、自己紹介がまだだったわね。私は部長の北条レイ。宜しく！ちなみに3年生だからね。」
話をきいていないようだった。

そう言うと彼女はイスに腰掛けた。資料室は以外に広くミーティングに使えるぐらいの6人がけの席、そして壁一面に資料の入った本棚がへばりついていた。まるで図書室のようだった。

「俺は宮沢京也です。」

「OK！、じゃあ本題に入ろうかキョウくん。 適当に座ってね。」

ふう、と一息ついてイスに腰掛けた。

「じゃあキョウくんに質問ね、君さ、1回死んでるでしょ。」

「なんで、そんなこと。」

(なにを言い出すんだこの人は！)

「まあ気にしないで。私も1度死んでるから。」

『気にするって!?!』

「ハッ！」 つい、いつもの様にツッコミを入れてしまった。

「す、すいません。いつもの乗りで突っ込みを……。」

「い、いってことよ。」

俺のツッコミに驚いたのか北条さんは目を丸くしていた。

「じゃあ。どうしてそうなるかを説明します。まず、あなたにはバトルに参加する権限があります。」

「バトルですか？」

願っても無いチャンスだった。なにせおもしろそうだったからな。それにバトルと3年前の事件が関わっていることは間違いなさそうだった。だが、疑問はまだあった。

「でもどうして俺に権限が？」

「さつきも言ったようにあなたは一度死んでるからよ。ちなみにこの部活は表向きは手品を研究とかする部活になってるけど実際はちがうわ。この部活では各部活の能力者の個人情報管理したりして『ライセンス』の発行をする部活なのよ。」

(やはり普通の部活ではなかった。この部に入ればきっと事件に
歩近づける、この時の俺はそう思っていた。)

『ライセンス』

「まあ、まずこれをあなたに渡すね。」

彼女はニッコリとした表情で説明を始めた。

「ライセンスにわね、3個ほど機能が付いてるのよ。これがライセンス、形はカード型でこれ一枚で戦車が買えるほどの価値があるわなくさないようにね。で、これが説明書、目を通して。」

そう言うと彼女は生徒手帳を取り出した。

「生徒・・・手帳？」

「そう、これにも仕掛けが施してあるわ。ライセンスを手帳の裏にあるカードフォルダに差し込んでみて。」

指示どおりやってみたが・・・驚いた。最初の1ページ目が液晶画面、2ページ目がキーボードになった。

「す、すげー。」

「でしょでしょんw 科学技術の進歩の成果でしょw この手帳ね学校のホストコンピュータにアクセスできて、そこからネットにも繋げるんだw」と、彼女はうれしそうに答えた。

「そ、そうなんですか。で、どう使うんですか？」

「まずねー、パスワードとIDを入れてね。ちなみにそのライセ

ンスは君用だからね。　じゃあ手帳の裏を見て。」

裏にはパスワードとIDが書かれていた。

「それがあなたのIDとパスよ、ちなみに君にしか見えないから。」

入力すると俺の写真とその横にグラフが書かれていた。

「なんですかこのグラフ？」

「あなたの能力値とステータスよ。」

「能力？」

「そう、さつきも言ったけどあなたは1度死んでるわ。そして意識的にしる無意識的にしる『地獄』から帰ってきているの。」

「地獄？ですか。たしかに昔、交通事故で生死をさまよったことがあるって・・・でも、3歳の時ですよ！　そんな昔のこと・・・！」

「瞬昔の恐ろしい記憶がよみがえった。」

「年齢は関係ないわ。地獄での記憶は生き返るときに無くなるもの。」

「無くなる？」

俺は一瞬と惑ったがさらに話を聞くことにした。

「色と能力」

「そう、地獄で経験したこと、それとどうやって現世に戻ってきたのか・・・とかね。でもその代わりに『お土産』をくれるのよ。」

「お土産・・・ですか？」

「そう、そのお土産はね、記憶の最深部に埋め込まれるのよ。それはね、今の言葉で言うと『呪い』に近いものかなw」

そう言う北条さんの顔が一瞬曇ったように見えた。

「呪い？ですか。」

そう言うおれもなんだか沈んだ気持ちになった。

「このお土産には使い方があるのよ。あなたが『見えないはずの物』を見ることが出来るのもそのおかげよ。じゃあ手帳の4ページを開いてみて。」

4ページにはライセンスの使い方が書かれていた。

ライセンスには3つの使い方があります。

- 1、個々人が持っている能力によって色が変わります。
- 2、近くに能力者がいると共鳴振動を起こします。
- 3、生徒手帳に差し込むことでPCモードに移行します。

「読んだ？」

笑いながら北条さんが聞いてくる。

「じゃあライセンスを取り出してみてw」

驚いたことにカードの色が変わっていた。

「色が赤になってます。」

「やっぱりね。君見たときにそうじゃないかと思ったのよね。」

すかさず北条さんの顔から笑みがこぼれた。

「どつゆつ意味ですか？」

「赤、つまりあなたの能力は戦闘に優れているってことなのよ。」

「そうなんですか？」

「そうなんです！ちなみに私のは青、つまり回避と回復に優れているの。」

俺は昔やったことのあるRPGを思い出していた。

「まあ、論より証拠！ってことで今日はもう遅いから明日、授業が終わったらまた部屋にきてね。てか・・・来いよなw」

その時の北条さんの笑顔はとてもかわいらしかった。

時計に目をやると時刻は6時を回っていた。

「じゃあ私、職員室にカギ届けに行かないといけないからまたね。ちなみにライセンスと手帳のことは秘密だからね。」

俺の肩を叩くと彼女は校舎のほうにすたすたと歩いていった。旧校舎はもとの静けさを取り戻していた。

本当の部屋

次の日の放課後……

「やあやあキョウくん。来ましたかね！ じゃ、行くつか。」

「行くなって……どこへですか？」

「決まってるじゃん。 体育館！ ついてきて！」

（質問の時間をくれよ。） そう思いつつ体育館に到着した。

（実は体育館にも秘密があったりして。。。）

「あるわよw」

「あんのかよ！ てか俺まだなにも言ってるねーし。」

「まあまあ硬いこと気にしない！」

そう言うと北条さんはステージの裏の階段の下の壁をしきり調べ始めた。

「なにやってんですか？」

（まさか柱にスイッチがあってエレベータになってるとかね？）

「そうよw」

「そうなのかよ！……！ てかなんであんた分かんだよ！！」

「てへへ。」

「てへへじゃねーよ！……！」

（また突っ込みをいれてしまった。）

ガコン！……！！

「来たわよ。」

なんと柱が開き、エレベーターが姿を現した。

「……………」

呆然と眺めるしかなかった。信憑性に欠けていた能力の話も（ああ、多分全部本当なんだろうなと思った。）

「なにばやばやしてるの？ 行くわよ！」

もはや正直放心状態のおれにとっては答えることが出来なかった。

「あ……。いまから何処へ？」

「本当の部屋よw」

「え、だって『資料室』が部屋じゃないんですか？」

俺の話を割るようにアナウンスが流れる。

「チ~~~~ン!! 地下4階です。」

「ああ、4階か~~~~。 八八~~~~4階!!」

「いまさらなに驚いてんのよ。」

「ただだ~~~~だつて~~~~え? よ・・4階!!しかも地下
!!!」

(なんてハイテクなんだ~~~~しかもいくら金使つてんだよ!!
この学校!!!)

「「ごちゃごちゃうるさいわね! 男の子でしょ!! そんなことよ
り部室部室w」

地下とはとても思えないほど広い空間~~~~校舎の中と同じような
感じだった。

「ここが本当の部室よw」

自慢げに答える北条さんは扉にあるカードリーダーに自分のライセ
ンスでロックを外した。扉を開けると同時に電気が部屋を照らす。

「荷物適当に置いてね。」

部屋を見渡すとパソコンが3台、それに本棚とコーヒーマーカーが
備え付けられていた。

「そつえば他に部員いないんですか?」

「居るわよ。あと6人w そのうちの1人は入院中だけどね。」

「そうなんですか。」

「ちなみにこの学校の地下にはいろいろな施設が配備されているわ。ちなみにここは地下4階通称『第17区画』だから。」

（また地下だけに『奥が深そう』な話だ。）

「うまいこと言ってんじゃないわよ。」

「だからなんでわるんですか!」

いつしか退屈と言っ言葉は俺の頭の中から吹っ飛んでいた。

粒子と空気

「じゃあ早速君が能力を使うための練習をしようか。」

そう言うと彼女は壁にあるボタンを押した。驚いたことに机や本棚は床へと収納され部屋には何も無い状態になった。

「今更ながらすごいシステムですね。北条さん。」

そんな俺のことはお構いなしに北条さんは集中し始めた。

「それでは！ 訓練をはじめましょうか。いくわよ………『デ
イメンジヨン！……！』」

そう叫ぶと彼女の前にを電気を帯びた『人形？』のような鎧につつまれた人の形の物体が姿を現した。大きさは彼女の腰の高さくらいで白と黒のグローブをはめているようだった。

「これが私の能力、名前は『リバーズ・リバーズ』よ。さらにね。
『キャッチ！……！』」

驚いたことに光は北条さんの両方の手にまとわりつき、形状を小手に姿を変えた。

「これもわたしの能力、左手は破壊、右手には再生の力が宿っているの。この状態を『アームズ』、さっきの人の形方をしたのが『ドール』と呼ばれているわ。」

「ドールに……アームズ。」

いまさらながらに驚いた。

「ちなみに初心者はアームズの状態をキープするのが精一杯、ドールは序列25番以上クラスの人ぐらいしか使えないから練習しないとね。」

(練習すれば使えるものなのか?)

「そつえば北条さんは序列何位なんですか?」

「13位。」

「え、今さらりとすごい言葉が帰ってきたような。。。」

「だから! 十三位!」

「この学校何人いたっけな? ははは。」

笑い混じりにつぶやくと。

「男女合わせて800人、そのうち能力者は400人くらいよ。で、そのうちの上位10人が今の生徒会よ。」

「ちなみに昨日いたコニちゃんは32位。」

あの笑顔がまぶしい人が32位だなんて・・・

「でも去年の3年生を省いて繰り上げだから・・・去年なんて18位だったし。」

「十分強えーよ!！」

「あなたも練習次第で強くなれるわ。じゃあやってみましょうか。まず利き手を前にかざして。『キャッチ』と叫んでみて。」

言われた通りに前を出す。

(こんなことで出来んかよ。)

「『キャッチ!！」

俺は手に力を込めて叫んだ。

衝撃と少女

次の瞬間、左手に光が集まる。

「す、すげー。なんだこの暖かい光は？」

俺の左腕は鎧のように硬い小手に、さらに日本刀に近い鞘さやに収まる刀のような物をつかんでいた。

「じょうできね。じゃああなたも能力がどれ位のものなのか、試させてもらうわ。じゃあ始めましょうか、マジケン恒例行事、『わいがり進か入部員歓迎バトル』を、「キヤツチ！！」。

彼女はさっきよりも早く能力を展開させた。

「タ、タイム！ そんないきなり！ む、むりですよ！」

『問答無用！』

そう叫ぶ彼女の一撃をギリギリ避さける。

「ドゴーン！！」

振り向くと彼女の左こぶしはそのまま一直線に壁へと吸い込まれた。するとどうだろう。普通の打撃では付かない様な大きな凹くぼみが出来ていた。

「こ、殺される。」

多分俺じゃなくてもこの場にいたらそう叫ぶに違いない。

「あちゃー。壁壊しちゃったw てへ！ さあ、早く刀を抜きなさい。私はまだ本気のホの字も出してないわよ。」

笑いごとにならないぐらいの身の危険、俺の体は震えていた。だが覚悟を決めないとこの先「バトル」なんてできない。

「しかたない、やってみるか！。いつけええええー！！！」

俺は鞘さやから勢いよく刀を抜いた。昔マンガで読んだことのある『抜刀術』を意識しながら。次の瞬間、刀を手にした右手にずしりと重い反動がのしかかり、北条さんは壁に向かって吹き飛んだ。

「な、なんなの。いったい何が……。ガードしていなかったら……。やられてた。」

北条さんはつぶやく、北条さんとはつさに『ドール』を出してガードしていたようだ。『リバーズ・リバーズ』の左腕の鎧はこなごなに砕けていた。

俺は右腕に違和感を感じながら刀を鞘さやに戻した。すると小手と刀は光になって何事も無いように消え去った。

「あの、大丈夫ですか？」

俺は彼女に手を差し伸べようとしたが右腕が思うように動かない。

「衝撃波いっげいひ、多分あなたの能力の正体は剣風けんふうで空気を振動させて波を起こし、剣撃けんげきの威力を増幅させる能力、でも多分条件付ね。その証拠に反動で右手が痺しびれてるんじゃない？」

どうやら本の彼女に戻ったようだった。

「はい、でも俺にこんな能力ちからがあるなんて・・・正直複雑な気分です。でもなんで今まで出来なかったことが急に出来るようになったんですか？」

俺はそのことがきになった。だってそうだと、いきなりこんなことが出来るなんて・・・はっきり言って信じられない。

「それは貴方の『ライセンス』の効果よ。ライセンスは能力を増幅させてくれるのと同時に『リミッター』の役割もしてくれるのよ。」

「リミッター。ですか？」

痺れる右腕を抱えながら聞き返す俺を見かねたのか、北条さんはまた集中を始めた。

「まあその話は後として、壁とあなたの腕の治療をしないとね。」

「「キヤッチ!」「」。」

彼女は能力を手に移した。

「腕を出して。」

俺は言ったように手をかざす。

『リバーズ!!!!!!』

彼女がそう唱えると俺の右腕は光に包まれた。

「どっつ？治ったでしょ。じゃあ次は壁つと。『リバーズ！』」

壁もみるみるうちに元に戻っていく。 啞然^{あぜん}とする俺の後ろのドアが開く。

「部長、言われた通りに来ましたよ。あと、差し入れも。」

振り向くと金髪の背の高い男がそこにいた。

旋律と能力

「おお、おつか……で、誰だっけ？」

さっきの衝撃で頭を打ったのか、ただボケていただけなのか、北条さんはケロツとした表情で金髪の男をしばらく眺めていた。

「数少ない部員である俺のことを忘れたのかい？、しかも同じクラスだろ！！起きろ！！。」

その人はちらりと部屋の様子を見ると俺のほうに近寄ってきた。

「おお、新入部員か？珍しいね、てかこの様子じゃ『かわいいがり』をしてたな北条くん。」

そう言うと彼は北条さんのほうに振り向く。

「そんな、人聞きの悪いこと。そんな、どつかの相撲部屋すまむつやじゃないんだから。入部歓迎バトルじゃないw それにあんたもやられたでしょ。」

北条さんはニコニコしながら袋を見つめていた。

「そうでした。で、結果はどうだった？」

彼はなぜか天井を見つめていた。

「それがね。彼、私より強いよ。で、名前はキョウくん。」

(京也なんだけど。まあ自己紹介をしておこう。)

「宮沢京也です。宜しくおねがいます。」

「俺、3年の茂野光彦しげのみつひこ、ちなみに副部長やってるんでよろろー!!」

(陽気な人だ、この人も強いのかな?)

『弱いぜ。』

「即答かよ!! てかなんであんなら分かるんだよ!!」

(こいつら何者?)

「そ、それは……。 あ!! そうだ、これ買って来ましたよ
!!」

話をそらされた。 いや、流された。

「見つけるのに苦労しましたよ。」

茂先輩はビニール袋しげを天にかざした。その光景はまさに……ライオンなんちゃらの猿のようだった。

「おお、キュウサン!! これが欲しかったのよね。」

次の瞬間、袋から缶のような物体が取り出された。

「じ、これは……」

俺は言葉を失った。

話は変わるがこの部活は新しい部員が入るたびに『殺し合い』的なことを毎回やっているのか？なあ？俺はそう思った。

箱と闇と能力

<<西暦20XX年、人類は・・・『みかん』に飢えていた。>
>

北朝鮮の度重なる核実験、そして秘密結社『ポンカン』による度重なるCM戦略、そしてみかんの産地偽装事件の発覚。

その結果みかんの信頼が激減、後に語られる死の7日間の始まりである。

そんな中、みかんの卸売^{おろしう}り業者達は積み重なるダンボールに頭を悩ませていた。

「つて『次世代果物伝説、キュウイ』の劇場版じゃないですか!!
しかもそれ初回限定みかんの缶じゃないですか。どこで売ってたんですか!!」

俺は怒鳴る、いや言わなければならぬと思ったんだ。

「どこつて・・・・・・果物屋w」

「果物屋・・・うかつだった。まさか・・・この変な部活で・・・
・・・出会えるなんて。」

<<2000年の発売に以来、全て店舗で売り切れ続出の伝説の作品。近年ゲーム化されるとかされないとか・・・>>

「この缶……僕に譲ってください!」

多分この時の俺は必死だった。

「だめだめ、これ部長のだから。」

(た、たしかに……じゃあ部長に交渉だ!)

「え、じ、じゃあ5万!! お願いします。なにを隠そうこの僕、会員登録番号1番なんです。」

俺は必死だった。だって……キュウイが……。この世で一番好きな食べ物なんだから!!

「だってよ?どうする?部長さん。」

茂先輩は困った顔で北条さんに意見を求めた。

「うーん、そうね。そこまで言うなら……。バトルでシゲちゃんに勝てたら……考えておいてあげるわ。ああ、ちなみにシゲちゃん……『本気』はだめよw」

いつものように北条さんはニコニコしている。

「約束守ってくださいよ。行きますよ!!」「キャッチ!!」「」

俺は再び手に力を込めた。

「おお、もう具現化出来るのか? しかも刀。じゃあ久々にやりますかね。」「ディメンジョン!!」「」

すると両手に銃のような武器を持ち、アメリカ軍のようなヘルメット、そして鋭い目とめ迷彩ガラの装甲をした人形のような物体が現れた。

「おもちゃの……兵隊？」

一瞬、背筋が凍るような殺気が俺を突き抜ける。

「そう、これが俺のドール！！名前は『After the tragedy』日本語で惨劇の後。どうゆう意味かは後のお楽しみ。お前には倒せねーよ。」

茂先輩の目つきが変わる。

「ドール……つまり序列25位以上！だが、サルも木から落ちる。！！先手必勝！！」

勢いに任せて鞘から刀を振りかざす。だが衝撃波は茂先輩のドールに当たる。

「やった。」

ドールは後ろの壁に吹き飛んだ。

「ハハ、人形に攻撃しても意味ねーぜ。ちなみに俺はチヨイ強い！！！行け！『After the tragedy』。」

そう言うと壁際に倒れていたはずのAfter the tragedyが姿を消した。

「どこへ消えたんだ？それに・・・北条さんが消えた？」

周囲に北条さんの姿は無く黒い壁が俺をとり囲んでいた。

「ハハ、すぐ楽にしてやるぜ。」

俺の頭上の壁から音が聞こえる。

「上から来る！！」

「残念、は・ず・れ。　なんだよ！！」

俺の左の肩から血が噴出す。

「ガハツ・・・！！」

おまけに目まいがしてくる。

「ハハ、なんでこんな弱い奴にやられますかね。部長さんは？」

その言葉に俺は憤怒した。

「クソ、お返しだああー！！！！」

シゲ先輩目掛けて切り込む。

「効かないぜ、ザコ！！」

だがドールが割って入る。剣は弾かれ、俺の顔にずっしりと痛みが

走る。

「くそ……もう一度!!!」

再び切り込むが衝撃波が相手に走らない。

「なぜだ？なぜ出ない。さっきは確かに!!!」

「どうした？終わりか？」

もう一度銃から弾が発射されそうになる。

「まだだ!!!、まだ俺は……一発も当ててね!!!」

剣に力を込める。

「ぼやぼやうるさいね。だが終わりだ!!!」

殺られる、そう思ったときだった。

「ストップ!!!」

怒鳴り声と共に壁に穴が開く。

「なんのようだ？部長さん!!!」

鋭い声でシゲ先輩が部長に叫ぶ。

「ドールは禁止!!!ってもう遅いか。あなたの負けねキョウくん。」

「

その瞬間体の力が抜ける。そして俺は床に倒れこんだ。

「強い……でもなんで……なんで『衝撃波起こらなかったんだ？』」

「それはねキョウくん、貴方の能力には条件があるからよ。」

「じょう……けん。」

そして俺はその場で意識を失った。

「ところであの加減の効かない「ハハ」って笑う副部長さんは？」

まだ頭がくらくらする。

「ああ、あいつなら帰ったわよ。眠いつて。」

「そうですか。」

「発殴ろうと思っていた俺をだれが攻められよう!!」

「ところでそのうるさい人、誰ですか？」

「ああ、綾瀬^{あやせ}!。チヨットカモン!!」

髪の毛を後ろで縛った女の子だった。

「どうも!! 2年C組の綾瀬川恵^{あやせがわけい}です! 宜しく。」

また新キャラか!!

「またバトルですか？」

恐る恐る聞いてみた。

「それもいいけれど・・・もう7時よ!」

時計に目をやる。

「こんな時間!」

つい口に出してしまった。

「明日は資料室集合ね。今度は部員集合させとくから。」
部員？そついえばま全員見てないんだっけ。

「じゃあまた明日ねw 遅刻はだめでござるよw」

「ござる？ まあいいか。いつもの笑顔で部長が手を振る。」

「おつかれさまで〜す。」

つられて綾瀬川さんも手を振る。帰り道が部長と同じなのだろうか？部長と綾瀬川さんはしゃべりながら同じ方向に歩いてゆく。

「もうすぐ完全下校時刻だ。明日もこんな日々が続くんだろうか。」

辺りが少しずつ黒にそまってゆく。教室や体育館にはまだ部員がいるのだろうか。ポツポツだが明かりが灯っている。空には明るい月が電気の消えた教室を照らしている。

俺は学校を後にした。

月と共に。

今から約3時間前、午後4時27分。

「生徒会役員、集合完了したか？」

メガネをかけた身長の高い男が問いかける。

「はい日向会長。^{ひゅうが}すでにメンバーは生徒会室のほうに集合しています。」

書類に目を通しながら寝癖頭の小柄な少女が答える。

「今月に入って奴らの出現状況は？」

「3体です。そのうち2体は夜乃君^{よのの}が、後の一体は私がw。」
そうしゃべる少女はなにか楽しげであった。

「そうか……。で、先輩達の手掛かりは？」

「今のところは何も……。」

少女の顔から笑顔が消える。

「そうか……。あの日からもう3年……。か。」

うつむきながら日向がぼやく。

「会長。そろそろ時間です。」

明るい声が日向に突き刺さる。

「分かった。行こうか湯坂くん……。」

そう喋る日向の顔がなぜか暗い。

午後4時35分、生徒会室。

「会長、今日はどのようなメンバーでいきますか？」

先ほどとは打って変わり彼女の表情はなごやかだった。

「今日は夜乃、と一之瀬。」

メガネをふきながら日向が答える。

「了解。」

冷めた表情で夜乃が答える。

「右に同じ。で、今日のミッションは？」

「行方不明者の搜索と…… 『眼帯のドールの撃破』。」

一瞬周囲が沈黙する。

「眼帯ってあの危険レベルAランクの？」

「一之瀬があたふたしながら質問する。」

「そつだ、今日こそ奴をこの世から……消し飛ばす。」

全員の表情がひきしまる。

「分かったよ。じゃあ俺は……。」

「お前は後方支援。」

「え……。」

「一之瀬は目を丸くしている。」

「よし、行くぞ！」

午後4時47分。 地下13階・第19区画。

「湯坂！扉を開ける！」

日向が怒鳴る。

「了解しました。」

湯坂は扉のロックを外す。

「全員準備はいいか？」

日向が問いかける。

「OKだ。」

夜乃が答える。

「こつちもだ。生徒会のトップの實力、みせつけてやるぜ。」

軽い口調で一之瀬も返答する。

「ギイイイイイイ!!」

そして扉が開かれる。この後に起こる惨劇を彼らはまだ知らない。

そして・・・事件は起こった。

アンダーグラウンド・パニック

> 帰ってきてから2時間ぐらいたった頃だったろうか多分9時30分ごろだったと思う。

>> プルルルル!!!!<<

部屋の奥から携帯電話の音が鳴り響く。知らない番号だ。

「はい、もしもし。」

電話のボタンに手をかけると同時に声がする。

「もしもし！大変なのよ！！すぐに学校まで来て！！」

聞いたことのある声だった。

> もしかして北条さんかな？<

暇だったのでとりあえず行くことにした。

「お、来たきた。」

やっぱり北条さんだった。

「なんですか？こんな時間に。」

少し眠かった俺は用件だけ聞いて帰ろうとしていた。

「実はね、大変なことが起こったのよ。生徒会室に行くわよ。」

そう言うと彼女は俺の手を強引に引っ張って体育館のエレベーターまで連れて行った。

「いい加減何が起こったのか説明して下さいよ！」

俺は怒鳴るように声を張り上げた。がエレベーターに引きずり込まれた。

「実は生徒会から非常事態宣言が出されたのよ。」

まじまじとした表情だった。

「非常事態？ それって……」

ドゴーーーーーン！！！！

ちょうど地下6階に差し掛かった頃だった。衝撃と共にエレベーターが停止する。

「な、何が！！」

とまどう俺が横を見ると北条さんの顔が青ざめていた。

「奴らが来たんだわ。」

いつもの北条さんらしくなかった。

「や、奴ら？」

一瞬鳥肌が立つ。

「早くエレベーターを降りなきゃ。」

いやな予感がした。

「な、いったい何が起きているんだ！ いったい奴らっていったい何なんですか！！」

早い口調で俺が問いかける。

「『ファントム』、私たちはそう呼んでるわ。」

北条さんの顔がこわばる。

「時間が無いの。さ、行くよー！」

キャシヤな手が俺の腕を引っ張る。 　これが俗に言う『超展開！！』

この時の俺はどうして北条さんが慌てていたのか理解できなかった。
いや、多分……

フラッシュバック

地下6階、空手部と部屋の表札に書かれている。俺と北条さんはなんとかエレベーターが抜け出した。

「ここは地下6階のようですね。」

エレベータに備え付けの懐中電灯で周囲を見渡す。

「困ったわね、なんとかエレベーターから出られたけど。」

停電だろうか、辺りが真っ暗だ。今何時なんだろうか？携帯に目を通す。

「今、10時14分。停電で復興までどれくらいかかるんですかね？」

俺が問いかける。

「おかしいわ、この学校停電になると非常電源が入るはずなんだけど・・・」

だんだん目が慣れてきたのだろう。北条さんが首を傾げているのがなんとなく分かった。

「あの、もしかしてその『フロントム』とか言つのと関係があるんじゃない？」

戸惑う俺の手を引つ張られる感じがした。

「ちょっと懐中電灯かして。」

なにか閃いたのか北条さんは手を叩いた。

「生徒会室は地下10階にあるの、でね。この地下はエレベーターを軸にしてその周りに部屋、さらにその周りに螺旋階段があるの。」
北条さんがくすりとぼやく。

「でね、その階段は地下10階にある生徒会室室まで繋がってるのよ。」

大体察しがついた。

「つまり……10階まで降りると。」

それを聞いて少しやる気が落ちた。

「ここが階段よ。」

俺は目を疑った。

「……な、何で。なんでこんなに広いんだ？」

そこには俺の部屋よりも広い幅でなおかつ階段の1段1段の幅が広い、ちなみに俺の部屋は6畳なわけで……

「早く降りるわよ!! めざせ! 10階!!」

こうして俺たちは階段を降り始めた。

長い間歩いた気がするのになにか違和感がある。

「だれか来るわね。」

北条さんの声が響き渡る。

少し緊張が走る。実はおれはだいのお化け嫌いなわけで・・・

「だ、だれだ。」

次の瞬間停電が治ったのだろうか。急に辺りが明るくなったせいで目がちかちかする。

「た、たす・・・け・・・て。」

ピエロの仮面を付けた少年が叫んでる。

「ゲ、ホ、ホラー展開！！ あ！」

口が滑ってしまった。・・・

「夜乃君？」

北条さんが呟く。しりあいなのか？ あんなのと？ まさかね。。。

「ほ、北条！！ 頼む・・・この仮面を・・・外してくれ～～～～」

夜野の悲痛な叫びが階段に響く。

「わあああああああ！！」

夜野の声が天を裂く。次の瞬間黒いドールが姿を現した。

「お前も・・・お前も・・・ここに連れて行ってやるよ！！」

気のせいだろうか、夜乃の声が違う。そう、聞いたことも無いような声だった。

「あの仮面、あの時と一緒に。あの時と・・・また・・・あんなこと・・・いや、いやだよ・・・もう！！」

北条さんの顔が青ざめ床にへたれ込む。

これが・・・長い夜の始まりだった。

螺旋と階段

不気味な足音……

「ドールって事は序列25位以上、しかも生徒会室から来たって事は。」

あまりそれ以上の事は考えたくなかった。

「たすけて。は、速く!!！」

黒乃の黒いドール、それは西洋の騎士が黒い鎧を着けながら前かがみの姿勢をとっている人形のような形だった。

「この威圧感、半端じゃない。」

尖った5本の爪それはどんな物でも貫き抜けそうに見える。

「北条さん、しっかりしてください!!！」

ピエロのマスクの中からは鋭い眼光が光る。

「た、頼む……ま、マスクを!!！」

そう叫ぶ夜乃の声がまた変わる。さらにドールが俺を狙う。

「まず……貴様からだ。こ、殺す。」

不気味に光るドール爪が俺に威圧感を送る。

「出てくれ！ キャッチ！！！！」

俺は腕に力を込めた。そして勢いよく刀を引き抜こうとしたのと同
時だっただろうか。夜乃のドールの鋭い爪が俺に襲いかかる。

「間に合え！！」

刀を鞘から抜こうとした瞬間、夜乃のドールが姿を消す。

「残像。」

「……………」

たしかに手ごたえはあった。ただ、それと同時に俺の心臓に激痛
が走る。

「遅いんだよ。お前。」

どうやら俺が攻撃したのは残像だったらしい。俺の体に冷たいもの
が突き刺さる。

「ク、クソ。」

だんだん意識が薄れていく。体から暖かい血が体から流れているこ
とを感じる。

「い、いやあああああああ！！」

北条さん叫び声が耳元で聞こえる。俺の体にはなにか重たい感触が残る。

「あは、はははは。見ろ！！ 血まみれだ！！」

不気味な笑い声と叫び声が交差する。夜乃のドールの爪が俺の腹を貫通していた。

>> し、死ぬのか。俺。 <<

痛みがだんだん鈍くなってくる。さらに鋭い眠気が襲う。

>> もう駄目なのか。死ぬのは……いやだ。 <<

俺がそう思った瞬間だった。

「……………」

「……………」

「……………」

いつたい俺は……

次の瞬間俺は白い雪が降り積もる広い場所に倒れこんでいた。

「……………」

「ここが……………天国？」

「……………」

「俺……………死んだのか？」

「……………」

広い雪の積もる世界。そこには大きな木が1本立っているだけだった。だがその木はなにかおかしかった。

「……………」

「……………」

「あの木……………雪が積もってない……………」

まるでここは止まった世界。積もる雪。そして……………

俺は死んだ。

雪の降る世界

どこからか鼻歌まじりの笑い声が聞こえる。

「この唄、たしか……。」

そう、あの曲だった。

「そう、この曲は、『ジュラシックパーク』のテーマだ!!」

「……………」

「ちげーよ!」

強烈なツツコミが入る。

「久しぶりだね。と言っても君は覚えていないはずんだけどね。」

なぞの声が俺に囁く。耳を澄ますと木の方からだ。

「……………そうだな。君にあげたお土産、どうやら君に合っていないな
かったようだね。」

周りを見渡すと1人の少年が木の下で笑っている。

「お前はだれでここはどこだ?」

この時俺は意識がぼんやりしていかすこし混乱していた。

「僕？ そうだな、じゃあ『ミスト』とでも呼んでもらおうか。」

少年はにやりと笑う。

「ここは夢と意識の間だよ。」

少し自慢げに少年は話す。

「……つまり俺はまだ死んでないってことか？」

俺はテスト返しの時ぐらいに緊張していた。

「うん、そうだよ！！」

そう答えると少年はにっこり微笑む。

「まあ時間が無いから手短かに話すよ。あのピエロのマスクは13種類
の魔神具の一つなんだ。」

少年の声はどこかで聞いたことがあるような、なにか懐かしい感じがした。

「魔神具？」

つぶやく俺に少年が答える。

「そう、魔界の王が作った13個の道具。地獄にはね13個の国があるんだよ。でね、その国々が争いを始めた。争わないように神が

「1つの提案をしたんだよ。」

しびしび語る少年。どこかであったような気がする。

「提案？」

「そ、簡単に言えば、『ゲーム』かな。」

少年が微笑む。

「ゲーム？」

その瞬間急激な眠気が俺を襲う。

「ルールは人間界に13個の魔神具を落とし、自分が選んだ人間にそれを回収させる。単純だろ。」

まさかと思った。

「単純つて。じゃああのマスクも？」

どうやら予感は的中したようだった。

「そのとおり。あれを回収してほしい。」

まじかよ。

「そんな、現に今殺されかけたじゃないか!!」

眠気を振り切ろうと力をいれようとするが力が入らない。

「まあまあ、落ち着いて。その代わりに君に五つの能力を与えるよ。」
怪しい笑みが俺のほうを向いている。そして俺は思い出した。

「能力？　そうか、君が俺に昔お土産を渡したのか。」

過去の記憶がよみがえる。

「冊子がいいね。そう、君にその力を託したのは僕だ。」

「やっぱり……だがなんで俺に？　なんでこんな力を？」

「君は1つ誤解しているね。その能力は元々君が生まれつき持っていた能力なんだよ。僕が渡したのはそれを開放するための能力。そしてこれから君にあげるのは……悪魔の力。」

少年の顔が強張る。

「悪魔？」

「いったいどんな能力を。」

「さ、そろそろ時間だ。」

少年がポケットから時計を取り出す。

「それは？」

見たこともないような形の時計だった。

そう自分に言い聞かせるが手の振るえが止まらない。電話に出るべきか……

「も、もしもし?」

手が勝手に動く。そして……どこかで聞いたことのあるセリフが頭の中を駆け抜ける。

「もしもし! 大変なのよ!! すぐに学校まで来て!!」

電話は切れた。その瞬間俺の手から携帯電話がすり抜ける。

「……………あの夢は……現実?」

そう呟く俺の体から力が抜ける。そして俺はベットにへたり込んだ。

「俺。疲れてるのかな? ははは。」

ふと机の上に一枚の封筒が目に入る。

「こんなのあつたっけ?」

封筒を開けると一枚の手紙とカードが入っている。

>> この手紙を見ている君へ。さっき君には5つの能力を託した。
『悪魔。』その力が君を守ってくれるだろう。<<

1、 相手を拘束するための力『チェーン。』

2、 自分の力を解き放つための力『タナトス。』

3、 今見える世界を見定める能力『コアビジョン』

4、 もう一つの刃『クサナギ』

5、 そして君の中に眠る……約束。

最後の所が読めない。だがさっきのが夢じゃないとしたら。北条さんが危ない！！

「迷う余地なし……か。」

時間が無い。俺は学校へ向かう。

そう、この後に起こることを。止めるために。

彼の覚悟と儂い希望 前編

「お、来たきた。」

「……同じ展開……まさかな。」

「実はね、大変なことが起こったのよ。生徒会室に行くわよ。」
と手を引つ張る北条さんに俺はおもむろに口を開く。

「生徒会から非常事態宣言……ですか？」

北条さんの足が止まる。。。。それと同時に俺から手が離れる。

「き、君、な、ぜそれを？」

動揺したのか彼女の顔がこわばり足が止まる。

「すみません、北条さん。」

振り返る彼女に俺はポケットに忍ばせていたスタンガンで気絶させた。。。。。

「一人でいつ。。。。。」

力が抜ける彼女を拾い上げる。漫画の主人公だったら腹に一撃で気絶。。。。。

「フツ……だせーorz」

女の子にこんな事する人間が。。。まともじゃないことぐらい分かっていた。

「行つてきます。」

彼女を後に体育館へ走る。キョウは覚悟を決めエレベーターに向かった。

ドゴーーーーン!!!!

ちょうど地下6階に差し掛かった頃だった。衝撃と共にエレベーターが停止する。

「き、来た! あの時、あの時と同じ。。。。」

自然と震える体から汗がにじみでる。死の恐怖。

そして生きる事への執着心。

二度も死んだ人間の言うことじゃないけど。。。。

怖い。

そして俺の目の前にピエロが現れた。

あの時と同じく夜野の悲痛な叫びが階段に響く。

「わあああああああ!」

その声は、何を訴えているのだろうか。

「次は負けない。確実に仕留める。行くぞ『ファントム!!!』」

始まり。退屈な日常との決別。

あの日から俺は。。。強くなったのだろうか？

そしてあの事件から1ヶ月の月日が流れた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2528d/>

『さい・フリ！！』

2010年11月13日14時32分発行